

令和八年春号（2026年）

第546号



あたらしい道

【自我を放る】

この道は

〃自我は吾を焦がす〃

といふんです

いっそもう自分でね

—にいきい自分を放っちゃおうって

その氣持ちにさるんですね

# あたらしい道

令和八年 春 546号

## 目次

テーマ「自我を放る」

ことのは 自我を放って自分が生きる……………1

日本の国柄 「茶道」と日本の伝統文化……………4

令和七年度 第二回全国壮年の集い……………14

寄稿 美しい死に思う……………21

熊本 満崎

安……………21





寄稿 憂国の武士 若泉 敬—— 福井 濱田 啓資 …… 29

おもい 三月下座奉仕を終えて—— 福島 高德 文親 …… 34

おもい お米の理—— 東京 山口 二雄 …… 40

訪問記 伊藤誠治さんを訪ねて—— 東京 佐瀬 康志 …… 43

編集後記 …… 46

(表紙題字 松本草垣女史御親筆 とびら書 松下賀奈子さん)



油絵「千枚岳から見た赤富士」 愛知 高橋佳孝さん作

ことのは

# 「自我を放る」

## 自我を放って自分が生きる

いっそ、もう自分でね、ゞしにくい自分を放っちゃおうゞ って、その気持ちになるんですね。

ゞどうなとなるわ 天にお任せしようゞ と、その気持ちになるんです。そうしたら気楽です。

嬉しくて、自分の気がね、ゞはいくくくそうだくゞ となるんですよ。自分をキュツと、こう抱いていないで、放った気持ちになったらどうですか。

——ある生真面目な青年に対して——

## 自我でなくこの道の理によって

喜んで、とび越してお通りになれば、思わん不思議がね、あっちからもこっちからも、ぽか／＼と湧いてくることは、これは請合いですからね。

この道は、〴〵自我は吾を焦がす〴〵 とうんです。

「我」は自分を焦がしちゃうんだ。自我は捨てるんですよ。で、自我じゃなくて、この道の理によって、〴〵さあやるんだ〴〵 ということでお燃やしになるのが本当なんだぞ、ということをお、皆さん 〴〵成る程〴〵 と、よくわかってもらいたいとうございます。

結局それが、ご自分の徳になるんですからね。

（「松の間」でのお言葉より）

# 「書簡集」のお言葉 (抜粋)

気になることを先になす

考える徳よりも 浮かぶ徳が大事  
聞くよりも 見る方が大事

掘ったら 掘ったら きまって埋めるだろう  
苦労は 掘ることである  
きつと 自然が埋めてくれる

気になることを 先になす  
それが 人生の最大の 身につくことである

# 「茶道」と日本の伝統文化

編集部

茶道とは「茶の湯」とも呼ばれる日本の伝統です。亭主が茶室でお茶をたて、客人をもてなすというもの。茶道には細かい作法がたくさんありますが、それらはすべて、お茶をおいしく飲むために考えられ、現在のようないろんな形になってきました。茶道について、『日本茶マガジン』の記事から、分かりやすくご紹介させていただきます。

茶道とは、英語で「TEA CEREMONY」といわれる通り、お茶の儀式、様式を指します。茶室、掛け軸、花、庭、茶道具、ひ

とつひとつの作法。茶会が行われている時間もふくめ、すべてが一体となった「茶道」という総合芸術なのです。

茶道を通して、亭主は客人を心からもてなします。亭主とは、茶会を主催する主人のことで客人がお茶のひとつときを存分に楽しめるよう、亭主は最大限の準備をします。

茶室を丁寧に掃除したり、庭をすみずみまで手入れしたり、季節にふさわしいお茶菓子を選んだり、どの茶道具を用いるか、に至るまで誠心誠意の気配りをします。客人もまた、

そんな亭主の心に応えるべく、最大限の礼儀を以って茶会に臨みます。

茶道の精神を表す「一期一会」いちごいちえは、「一生に一度きりの機会」という意味です。もう二度と会えない相手だと思つて、今できる最高のおもてなしをしましょう、といった心が込められています。

### 茶道の作法とは

茶道には細かい作法がたくさんあります。お茶のたて方、飲み方、座り方、立ち方、歩き方……。いくつかの流派がありますが、流派が変わると作法も少しずつ変わってきます。これら作法は、いったい何のためにあるのでしょうか？

茶道の作法は、すべてお茶を楽しむために考えられたもの。亭主が客人に美味しいお茶

を差し上げるため、客人が亭主から美味しいお茶をいただくため、さらにはお茶を通して、亭主と客人が心を通わせるため、もつともよいとされる形なのです。

私たちがいつも気にかけないような作法の数々。一見、堅苦しいものに思えるかもしれませんが、大切な意味が込められています。一度、ゆっくりと時間をとつて試してみるのもいいでしょう。

### 利休七則とは？

りきゆうしちそく  
茶道といえは千利休。せんりのきゆう茶の湯を芸術まで高めた人物として知られています。利休が語つた茶道の七大原則が「利休七則」です。誰でも理解できるシンプルな原則ですが、いざ実践するとなると難しい……そんな精神が紹介されています。

その七つの原則はこちらです。

茶は服（飲む意味）のよきように点<sup>た</sup>て

炭は湯の沸くように置き

花は野にあるように

夏は涼しく冬暖かに

刻限は早めに

降らずとも傘の用意

相客<sup>あいきやく</sup>に心せよ

詳細については次のとおりです。

### 【茶は服のよきように点て】

「服」とは飲むこと。お茶を飲むことを一服<sup>いっぷく</sup>と言ったりします。「飲んだ時に美味しいと感じるようにはたてましょう」という意味です。もちろん相手が美味しいと感じることが重要。

客人の好みに合わせるだけでなく、時と場合や客人の気持ちを考えて、そのときにベストなお茶をたてることをすすめています。

### 【炭は湯の沸くように置き】

お茶をたてるためにはお湯を沸かしますが、利休の時代では炭を使うのが一般的でした。炭の置き方によつては、お湯が早く沸き過ぎてしまつて、扱うときに熱すぎてしまひます。反対に遅すぎると客人を待たせてしまうことになります。

炭火が強くなつたり弱くなつたりするものいけません。ちようどよい火加減が一定になるよう、炭を置くのが重要なのです。つまりは準備が大切、ということ。炭に限らず、茶道全般にあてはまる一則でもあります。

【花は野にあるように】

「花が咲いていた状態を感じさせるように生けましょう」という意味です。咲いていた状態をそのまま再現するのではなく、匂の花が持つ生き生きとした美しさを表現することが求められます。

ときには花瓶や花器でなく、花かごを用いて表現されることもあります。単に花びらを散らす、といった表現方法も。奥が深いのです。

【夏は涼しく冬暖かに】

客人が快適に過ごせるような環境を作ることはもちろん、「涼」や「暖」を実現できない場合も、せめて感じさせる工夫をしましょう、という意味です。音や色、味わいなど五感をフルに使って相手を楽しませる心が込められ

ています。

【刻限は早めに】

時間ギリギリになつてしまうと、人は焦つてしまうもの。焦っている、いつもはしないようなミスが生まれたり、他人に思いやりのない言葉をかけてしまつたり……誰にでも心当たりがあるのでは？

常に早めの時間を意識していれば、自然と心にゆとりが生まれます。余裕を持った行動は自分の心がけ次第です。

【降らずとも傘の用意】

十分に準備をしたと思つても、もう一歩踏み込んで予測しましょう。もしかしたら雨が降るかもしれないし、思いのほか冷え込むかもしれない。道が混んでいたり、電車が遅れ

ることがあるかもしれません。

思いもよらぬ状況が突然おとずれると、人は混乱し慌ててしまいますが、前もつて色んな状況を予測しておけば、自分だけでなくほかの人を助けることにもつながります。

### 【相客に心せよ】

相客とは、一緒に客人となった人のこと。茶会では、亭主が招待した客人が、別の客人を連れて相席をすることがあります。とくに茶道が流行した戦国時代においては、敵同士が顔を見合わせる、ということもありました。

しかしここで重要なのは、初めて会った人はもちろん、気の知れた仲であつてこそ、同じように気を配ることです。どんな人にも分けへだてなく、互いに尊重しあい、楽しいひとときを過ごしたいものです。

ほかにも利休は利休道歌(利休百首)といつて、お茶の心をわかりやすく伝える和歌集を残しています。お茶を心ゆくまで楽しむための知恵と工夫がギッシリ詰まっていると言われていきます。

### 茶道の歴史

日本に初めてお茶が入ってきたのは平安時代のこと。当時はあまり広まらず、茶道が普及したのは鎌倉時代に入ってからです。これは禅宗の僧侶・栄西(えいさい)が日本へお茶を持ち帰ったのがきっかけと言われています。

室町時代に入り、お茶は徐々に流行。最初は「唐物からもの(中国製のもの)」や、派手なものを良しとする風潮でしたが、村田珠光という仏僧が「わび茶」と呼ばれる楽しみ方を広めたのを機に、「和物わもの(日本製のもの)」や質素なも

のが重宝されるようになっていきます。珠光は道具や茶室を質素なものにすることで、亭主と客人の精神的な交流を大事にしたのです。

これを発展させたのが竹野紹鷗たけのしょうおう。稽古や創意工夫を重要視し、茶道へ取り入れていきま  
す。茶道の美術性・芸術性は紹鷗が創つたと言  
われています。そして安土桃山時代になると、  
茶道の技術を紹鷗から学んだ千利休が「わび  
茶」を大成させました。

わび茶とは、日本らしい美しさ、日本人らしい精神・心構えを追求した芸術でもありません。その心は今なお受け継がれ、現代の茶道における基礎となっています。

海外では、茶道の心は武士道精神、禅などと並んで「日本文化の根幹」と言われるほど。気が付かないうちに、私たちも自然と茶道の

心、お茶をもてなす心を持つているのかもしれない。

### 茶道の流派

千利休がわび茶を完成させたのち、利休の子孫たちは「三千家」と呼ばれる流派に分かれます。それぞれ子孫が独自にわび茶・茶道を解釈し、発展させようとしたものです。

#### 裏千家

裏千家では、茶道を「ちやどう」と読みます。時代の変化に柔軟に対応していく流派で、こんもりと泡を立てるお茶で知られています。裏通りに面していたため「裏千家」と呼ばれるようになりました。

#### 表千家

表千家は、できるだけ利休の茶道をそのまま守ろうとする流派です。茶道を「さどう」

と読みます。

裏千家とは反対に表通りに面しており「表千家」と呼ばれるようになりました。

### 武者小路千家

武者小路千家は、とことんムダをはぶき、合理的な作法を目指す流派です。茶道のことを「茶の湯」と呼びます。

京都の武者小路に庵があったので武者小路千家と呼ばれるようになりました。

### 利休以外の流派

現代の日本では右の三流派が有名ですが、千利休以外にも茶人はいましたし、ほかにもたくさんの流派が存在していて、数えると五百通りもあると言われます。

中でも古田流、藪内流、三斎流などの流派があり、「武家茶道」と呼ばれます。刀を腰の左側に差していたため、反対側の右側にふく

さをはさむようになりました。

茶道とはなにか、それぞれの流派によっても考え方は違いますが、もともとは「おいしいお茶」のために考えられたもの。茶道とは、今でもおいしいお茶を楽ししむためのものです。

(出典 「日本茶マガジン」 記事)

### 文化としての「茶道」

茶道は、日本文化の中でも特に「形」を通じて心を整える道として発展してきました。

茶室に入ると、華美なものはずべてそぎ落とされ、必要最小限の道具だけが置かれます。この「簡素さ」こそが、日本人が古来より大切にしてきた美意識の核であり、静けさの中にあるがままの「純なもの」を見ようとする日本の伝統文化の姿勢を表しています。

茶室は、身分や立場を超え、だれもが等し

く座る場として作られました。

風の通り道や光の角度までもが勘案され、大自然と一体となる空間を創造します。茶道の世界では、香りから温度・湿度・季節まで、あらゆる要素を「大自然からのささやき」として受け取ります。日本文化特有の「大自然との融合の美学」がそこにあるのです。

この一瞬を共にするという「過去からの縁<sup>えにし</sup>」は、「たつたいま」の出会いに偶然ではないものを感じる。茶道の「一期一会」は、出会いを大切にする日本人の考えであり、「縁を尊ぶ」のは、あたらしい道でも言われている価値観です。

現代は、情報が多く心が落ち着かない時代だからこそ、茶道の持つ静謐の力が重要性を増しています。お茶を点てる時間は、本当の自分自身に戻るひとときであり、自然や他者

への感謝のまなざしを思い出す瞬間でもあります。

茶道は、日本人が自らの気持ちを整え、周囲の人たちとも調和し、自然界の中で共生するための「心の型」なのです。

### 茶道のひとつくちメモ

- ①茶室の躍り口の高さは「人を平等にする装置」  
武士も刀を外して頭を下げ、身を低くして入るため、茶室では主従・身分が無く、皆が平等になる”。
- ②茶室の天井はあえて低い  
”頭を下げざるを得ない構造”で、謙虚さが自然に生まれる。
- ③茶碗の”正面”は客に向ける  
それは「あなたに気持ちを向けています」という、非言語的なメッセージ。

## 千利休の切腹

千利休（せん の ・ りきゆう、せん ・ りきゆう、大永二年（一五二二年）～天正一九年（一五九一年））は、戦国時代から安土桃山時代にかけての茶人、商人。

わび茶（草庵の茶）の完成者として知られ、茶聖とも称される千利休、今井宗久、津田宗及とともに茶湯の天下三宗匠と称せられ、「利休七哲」に代表される数多くの弟子を抱えました。

千利休は天下人・豊臣秀吉の側近という一面もあり、豊臣秀吉が旧主・織田信長から継承した「御茶湯御政道」おんちやのゆごせいどうの中で、多くの大名にも影響力をもちました。しかし、秀吉との関係に不和が生じ始め、最期は彼に突如切腹を命じられました。死に至った真相については諸説あり、未だ定まっていません。

天正一九年（一五九一年）、利休は突如秀吉の逆鱗に触れ、堺に蟄居を命じられます。

応仁の乱以来、大徳寺の山門は大破し長らく放置されていたので、利休は晩年にこの山門修築の事業を引き継ぎ、門の上に閣を重ねて楼門を造り、金毛閣を寄進した。その落成にあたって山門供養のために利休が春屋和尚に依頼し、その求めに応じて書かれたのが「千門萬戸一時開」せんもんばんこいちじにひらくの一偈です。

この文は、利休の影響力が自分の影響力を超えていると考え、秀吉を怒らせました。前田利家や、利休七哲のうち古田織部、細川忠興ら大名である弟子たちが奔走したが助命は適わず、京都に呼び戻された利休は聚楽屋敷内で切腹を命じられます。享年七〇歳。

## 岡倉天心 『茶の心』

ボストン美術館で中国・日本美術部長を務めていた岡倉天心おかくらてんしんが、アメリカで『THE BOOK OF TEA (茶の本)』を一九〇六年(明治三九年)に、出版、紹介しました。

茶道を仏教(禅)、道教、華道との関わりから広く捉え、日本人の美意識や文化を解説しています。天心没後の一九二九年(昭和四年、岩波文庫)には邦訳されます。訳者は天心の弟・岡倉由三郎の弟子である村岡博で、その後、約九五年を経て二〇二四年に第一二七刷に達しています。

新渡戸稲造の『武士道』と並んで、明治期の日本人による英文著書として著名で、ジャポニズム興隆や日露戦争における勝利によって、日本への関心が高まったヨーロッパ各国(スウェーデン、ドイツ、フランス、スペイン

など)でも翻訳された。世界的な名著を集めたペンギン・ブックス双書にも二〇一六年に加えられました。

茶道は戦後は海外にも広まり、世界的に大衆化が進んでいます。

### (参考文献)

- ・「日本茶マガジン」ホームページ
- ・「ウィキペディアフリー百科事典」
- ・「にほんご日和」  
ヒューマンアカデミーホームページ
- ・生成AI「シンリ君」

# 令和七年度 第二回全国壮年の集い

## 壮年部

今年度第二回目の全国壮年の集いが、令和七年十一月八日お式終了後から翌日昼まで、本部員を交えた11名が参加し、テーマ「因縁を通り切り喜びとさせて頂けるこの道」に沿って和やかに真剣にねりあいました。

初めに、テーマの趣旨を関塚禎人氏（東京）から説明され、続いて中村晃本部長から、『因縁』の資料より重要事項を抜粋して説明をいただきました。

・自分で「えらい事をしてしまった」と、こういう事を 何時思う時があるかもしれない。その時にはお詫びじやと、心底真心

を放り出してお詫びなさるんですよ。この道は、心底のお詫びは受け取ると申します。私をね、「ああもう……。本当にもういいわ、もういいわ」という風にくうちに感じさす様な、そういう心底のお詫びがあるはずでございます。

・「もうどうなるこうなるのも因縁納消ですよ。で、それを気負えばね、本当に立派になるんです。渋々じゃなくて、気負ったら、こういう風にね、チャツと丸く出来上がるはずでございます。そしたら、ああ素晴らしい。良かった、良かった」というそういう老後ですね。よろしいか。老後がね、必

ず皆さん、戴けるんですよ。」

・「本当に私嫌なんですよって、(因縁)はつきり申します。

嫌なのに、こういう風にならされちゃつたんですね。で、皆さんは違うんですよ。あなた嫌々ですね、とんでもない、嫌だと思っちゃいけませんよってね、そうするとね、やかたが嫌なら、自分達も嫌だつて、それね、私と皆さんとは違うのよ、それわかるでしょう。

私は知らない間に、願った訳でもないのにね、成つちやつたというんですね。皆さんは、始めに、誰かからお聞きになつてね、そらそうだ、つて、納得していらつしやつたんで、嫌々とは違いますわね」

等々、おやかたさまのお言葉を頂きなおしました。

小ねりあいでは、お二人からお話をいただき

きました。

造酒田みきたいちどろ一道氏(熊本)からは因縁について、

・父親との思い出の中で、仕事中に「人にペコペコ頭を下げすぎ」と言われていたことがあり、自分でも改めて実感されたこととでした。造酒田さんのお父さんは、お客さんに対して何度も頭を下げた姿は見たことがなく、一度頭を下げたら、あつさりとしており、相手に対し毅然とした対応だったそうです。あまり人に頭を下げ過ぎることは、みたまさんが嫌うことのようにです。これから、お父さんの様に、男らしく堂々とこの道を通らせて頂きたいとのことでした。

また、田治興たじこういち一氏(福井)からは、三月下座のお行について、

・下座中の事を振り返り、食堂のフライパン

清掃を婦人道友からの指示を受けた際に、腹から沸かされるいら立ち・反抗心を必死に抑えながら、上側は「ハイ」と返事をして、沸かされる思いに対し「ごめん」とお詫びしながら顔を強張らせ、お行に励ませて頂いたそうです。また、その日に出来なかつたことよりも、出来たことをおやかたさまにお礼を申し上げるよう、心がけています。

田治さんには、日々おやかたさまに素直な思いで、お行に励ませて頂くことの大切さを教えて頂きました。

翌九日は、佐藤成夫氏（三重）より、私たちが一層お行に励み、おやかたさまのご期待に沿っていけるよう、示唆に富むお話をいた

頂きました。

・生きているうちはお行、出来上がったと思つてはダメ

「この道のお行は高い山を目指して登るのと同じで、高い山の頂に立つても絶対下を見てはダメですよ」と、要は自分の足跡を見るな、（自分はこんなに凄いことをやって来たのだと、自分を自分で価値づけてはいけない）「たとえ頂上に立つても、さらに上を見るんで、まだ上々と下なんか見る必要ない、飛行機が飛んでいる上よりも、もつと上を見るんですよ」

（昭和43年4月6日 松の間でのお示し）  
これがお行の在り方です。

・自分が生きている間は出来上がらないので  
ごさいます。

要は天との約束はやりおおせ（因縁果た

し)、そのためにも長生きするのが天への報謝、ともおっしゃっています。

今後息の続く限り精進してゆきたいなと思うとのこと。

・「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」

この道もまさにその通りで、因縁果たしはおやかたさまを意識しないと絶対出来ない、あたらしい道の歴史は、おやかたさまと天村先生とお嬢さまとの通り越しですね、おやかたさまがどの様な思いでこの道を支えて、我々一人ひとりを抱いてくださったって来たか。

この道の歴史を学ぶことが大事で、松木草垣というお方は情の情の塊みたいな人です、本来ならば昭和55年で紫の間のお仕込みで終わる予定でしたが一年延ばされ、身上(身体)的には限度でしたが、気で一年

頑張り通され、これで終わる予定でいらつしやつたが、57年になると松の間でのお仕込みを始められました。その為おやかたさまは、「手前は天に貸しを作った」とおっしゃられました。自分の肉体の限界、全ての限界を超えて、我々をずっと仕込み続けてこられ、我々を今でも見守られているとのことです。

・昭和46年松の間にて、米国の心理学研究者・著述家であるジナ・サーミナラ女史がおやかたさまに対し、「おやかたさまはどのよう

に道の方を教育・指導されているのか」と尋ねられ、その問いに対し、「まず、眠っているみたまを呼び起こして、それからみたまに沿わない心をどんどん叩きますのよ、そしてそれから後はみたまに任せちゃうんですよ」と、この事がおやかたさまの担わ

れた天命です。「とにかく心が問題なんですよ、心のやり替え、今はこれを急ぎますんですよ、心をみたまに添うようやり替えなさいと申します、そしてこの道は、成つて来た理を頂くんだということを知つていただきとうございます」と、これが今おやかたさまが天上に帰られてからの我々のお行の在り方です。

成つてきた理を頂くとは、因縁通り因縁を果たし了<sup>おお</sup>せるように回してくださる、何者かがいらつしやる訳です。先祖さんであり、その先祖さんのバックボーンになつているのがおやかたさまです。その方を通して色んな事象を見せられる、聞かされる、感じる、それを喜んで頂く。「こんなバカなという都合の悪い事」は、これ全部自分の事です。それからこの道の目途・目標は国

替えだという事を、これを繰り返して言つてちょうだい」と、最終的にはすべて国替えに繋がるのです。

——等のお話を頂きました。

このたびのテーマのもとで、ねりあいを通じて思わせていただいたことは、因縁を通るとは、普段成つてくる苦を喜んで通ること、因縁納消のチャンスを頂いていると思います。ただし因縁を通つたかそうでないかは、自分が決める事ではなく、おやかたさまが決められることで、あくまでもおやかたさまが「ハイ、結構です」とおつしやつていただいたら因縁を通つた事にしてもらえるのだと思います。

また、自分にとつての苦（心配や不安・苦しみ・悲しみ）を喜べるはずが無く、すべて

を通られたおやかたさまだからこそ分かつて  
おられ、喜べない事を喜ぼうとしている気  
を見て、「良し」としていただいで下さり、因縁  
を通つた事にしていただけるのだと思います。

いよいよの時、皆さん各々大変なところを  
通られて頂いているかと思いますが、今有る  
ことを喜び、また、成つて来た苦を喜ぶ努力  
をし、「結構、結構」と自分に言い聞かせなが  
ら歩ませて頂きたいと思えます。有難うござ  
いました。

(愛知 坂ノ上義弘)





あさひ舟川の桜並木（富山県）

寄稿

# 美しい死に思う

—— 泉喬氏逝く ——

熊本 満崎 安

## 奔流のさ中に逝った泉氏

平成2年3月29日、何時になく熊本では桜が満開、天の時は足早に進んでいることを裏付けるかのようでした。

その花盛りのなか、道友泉喬氏が亡くなりました。享年65才でした。

生前、見舞いに来たお孫さんに、  
「おじいちゃんね、これからお星さまになつてずつと見守っているからね」

と泉さんは語られ、見守るご家族にも、  
「ありがとう、ありがとう、ありがとうございました」

と言つて、眠るが如く静かに息を引き取られました。先のことについては奥様にすべて遺言しておられ、自分は桜の花の満開の時期に死にたいとの願いだったそうで、誠に、果たしに果たし救われ切った人の、安らかで美しい死であったと惚べれます。

天が抱いてくれている、道の子の最期に感動さえおぼえます。

身を果たしお空の星となると言ひ  
65の春に益良男ますらおみまかる

時を同じくして熊本では、児玉亀太郎氏、原野氏御母堂様が亡くなりました。世直り国替えの天意と平成元年10月30日のご垂示「もともともとのもと これだけをゆひにゆひ ゆひおほしたから このつぎは皆に 驚くような必ず結果が見えるだろう それからもひとつ これからの一切合財 びつくりするほど りつばな事を見せるだろう、天上からの色々が これから素晴しく分かるから 皆も驚くだろう」のお言葉を強く思わされました。日本が、世界が、ポンポンと変わっていく中で、なるほど、天上からの色々が素晴しく分かるというお言葉が、逝かれた人たちを通して、天の道具としての道の人の果たしとして、ジーンと滲みるようでした。

3月は、天上から押しに押された月だったと思いました。4月1日、世界の夜明けを思

わせるような、何とも言えない、さわやかでおだやかな朝を迎えました。この日のご垂示は、大きな節目と申しますか、切り替えをいただいたと感じました。

「それでは皆さん 今晩からは皆さん方が喜んで喜んで 浮世に成り切るんですよ……明日からは 皆さんく、堂々と 御立派な自らを 頑張つて 浮世に向けて さあ わいわい 花を咲かすんですよ」

「道に成りきる」お行の日々を重ね来て、あたらしい道が愈々浮世に熨斗出るにあたって、「浮世に成りきつて……花を咲かす」といただいたのです。世直り国替えの新たな展開が明示されたように感じました。

泉喬さんや児玉亀太郎さんは、このような天の時の中で死を迎えられたのでした。本当に意味深いことでもあります。

気にしていると病気になるとも限らない

泉喬氏は、昭和42年2月16日、ご明断をいだかれて以来24年間に亘って、おやかた様から仕込みに仕込まれた、あたらしい道熊本支部での草分け的存在でした。あたらしい道を世に知らせ、広めんがために、地元はもちろんのこと、全国各地を歩まれました。社会的にもいろいろな要職にあり、名声高い方でありました。

泉氏の身上は、すでに10年位前から体の変調に気付いて、5年位前からはつきりとした症状が現れだしたそうです。それでも病院は拒み続けていましたが、治まりがつかず、2年前の昭和63年6月に至り手術を受けられました。その後更に1回手術をされ療養されていきました。

その間、身上押してのお行は想像に絶する

ものがあつたろうと思われれます。かつてご明断のことを話されたことがありました――。

「病気になるのはね 自分の心の持つて行きよ  
うで 病気になるんですからね あなたさん  
今のところ どこでもないけれども、あ  
まり気にしていると 病気になるとも限ら  
ないから ものを気にしないようにしましよ  
う」という決心をなさいませ よろしいかね  
自分の思い方一つで 病気になるつちやったら  
こりや 取り返すつきませんからね」

このお言葉についてご本人は、いかほどご自分を掘られたことだろうと、そのお行の程がしのべれます。

身上が進行する中での泉氏の発言には、「自分を叩きまして立て替えさせていただきます。申し分けございません。」という言葉が非常に多いことから、お行の真剣さが伝わります。

おやかたさまの泉氏に対するお言葉は、昭和63年3月9日をもって終了しています。それから3カ月後、大腸の手術を受けられることになるのです。

昭和63年1月7日、2月8日、そして最期の3月9日、おやかたさまと泉氏とのやり取りには、しみじみとした誠の誠、情の情の通い合いが感じられました。

泉氏は、身上が進行していたと見え、声には張りはありませんでしたが、振り絞るような精一杯の誠の発言が印象に残っています。

### 昭和63年1月7日の発言

「その昔、天は人間に知恵を下さいました。人間は、その知恵を自分のために使うようになりまして、心を生じ心から欲を生じ、今日のどろんこのような感じになり、天は見るに見

兼ねておやかたさまを台として、あたらしい道をこの世にくださり…… 私どもはそのあたりがたいご縁によりこの道に繋がらせていただき、本当に喜ばしていただいています。

この道は頭ではない。知恵ではない。またま、みたまがはたらくんだと教えてくださいました。……まだまだ頭を使い人間思案の多い私どもでございます。いかにして知恵を無くすか、頭を使わないようにするか、私の今年のお行の目途であります。

一切合切が、天の仕回しとしていただき……それを喜んで通らしていただいで、成程くと悟らしていただくことよって喜ばしていただく、何でも喜ぶ、苦を喜ぶ、いやなことを喜ぶことよって、その喜びを一人でも多くの浮世の方にお伝えします。

自分叩きながら、世直り国替えのお役に立

ちますよう今年も一生懸命やらせていただき  
ます」

おやかたさまのお返し

「本当にご立派ですね これからですよ  
もつとく 堂々と浮世に向けてこの道をご  
披露なさいませ そしたらあなたね 素晴ら  
しいご自分に変わりますよ お願いいたしま  
す」

### 昭和63年2月8日松の間お仕込み

「……ただ今からですよ おまえさんらしく  
素晴らしいな 本気の本気になって この道  
の者として もういつпенですよ あれやら  
これやらと 誠の誠になりきって 頼むく  
く お頼みしましたよ…… 堂々とこれから  
のご自分 誠の誠であたらしい道に どん  
くくく 情の情に成り切って お願い

く お願いが一杯です。さあどうぞ おま  
えさんく 手を貸してください お願いい  
たします どっこいしょ よしくく ど  
うぞお願いでございます。

泉氏

「有り難うございました。本当に遅ればせな  
がら、やっと本気の本気にならしていただき、  
道の子としてやらねばならぬこと、精一杯や  
らせていただきます」

### 昭和63年3月9日の発言

「お陰様で一昨日63才の誕生日を迎えること  
ができました。このような時代に、天上の仕  
回しによつてこの道にお繋がりできましたこ  
とを本当に喜ばしていただいています。」

私は、青年時代に人間とはなにか、人はなん  
のために生まれてきたのか、人はなんのため

に生きるのかという事で死ぬほど悩んだことがあります。戦争が激しくなりまして、特攻隊を志願したときに国に殉ずることによって、それが解消したかと思いました。

しかし、それは時代の感傷のうちに巻き込まれたことであつて、本当の解決ではございませんでした。

この道にご縁をいただきまして、初めて一切が明らかにされました。己の上に己がある。いつになつたらそれが分かるかといたゞいています。みたまさんよつて生かされ、みたまさんによつて一切が仕回されていることを分かせていただきました。

身上事情を重ねるうちに、それが一切、苦が自分作りであること。因縁納消であること。それによつて国替えができていくことが分からせていただきました。

私は、この道によつて生かされ、この道によつて果たしをさせられることが、自分の一生であると分かせていただきました。

一生懸命自分を叩き、己を砕きながら励ましていただきます。ありがとうございます」

おやかたさまのお返し

「ご立派ですよ、あなたのお肚で、今ね、あなたのことを、これからのさまさまのことを、この人は、どんどん、一切合切、あたらしい道によつて整理されるから、誠の誠で、素晴らしい男だから、必ず、どんどん、これからの時代に、面倒くさい事をしまつておかないで、堂々とこの道の者として、皆さん方と、どんどん、披露するんですよ、それが幸せ者ですよ、これを覚えておきなさいよ、如何ですか」

## 「特攻」から思いの切り替え

泉氏は、3月9日生前最期の松の間発言で、あたらしい道にご縁を戴いた心底からの喜びを切々と述べられています。

「特攻隊に志願したときに、国に殉ずることによって、(悩み)が解消したかと思ったが……それは時代の感傷のうちに巻き込まれたことであって本当の解決ではなかった、との発言には氏の人生観の切り替えられた喜び(本当の解決)が伝わってくるようです。

氏は旧第五高等学校2年生から海軍予備学生を志願し、旅順で特殊潜航艇の特訓を受けた後、小豆島にて特攻隊として待機中、出陣を前にして終戦を迎えられたそうです。まさに紙一重で命拾いされた若き海軍少尉でありました。

故郷熊本の焼け跡に帰還し、夜、満天の星

雲を仰ぎ見たとき、「この地球も、あの星雲の一つ。これからの我が生命は天にいただきたいもの。なれば星の輝きを浴びて生きていきたい。」と心決められたと聞いています。

戦時下にあつて、「国に殉じるわが生命」という思いが、敗戦後「天に戴いたわが生命」という思いに切り替えがなされています。

四半世紀を過ぎて、あたらしい道にご縁を戴いて、「はじめに一切が明らかにされました」と言い切られた末期の言葉には、充足しきつた最高の喜びと、それを分かせていただいたおやかたさま(天)へのお礼の気持ちが入められていると思います。

あたらしい道を戴いて人生を通ってきて分かせていただいたことについて、氏は次の事を強調しておられます。

①己の上に己がある。

②みたまさんによって生かされ、みたまさんによって一切が仕回わされている。

③苦が自分作りであること。また因縁納消であること。それによって国替えができていくこと。

④この道によって生かされ、この道によって果たしをさせられることが、自分の一生である。

誠に堂々とした天に向かつての披歴でありました。

これに對して、おやかたさまから、次のようなお言葉がありました。

「これからのさまさまのことを この人は一切適切 あたらしい道によって 整理されるから……」

「道の者として 皆さん方と どんく披露

するんですよ それが幸せ者ですよ これを覚えておきなさいよ」

### キラ星となつて見守る

あたらしい道によって整理されるということがどういふことかは、故人のみたまさん、ご先祖さんは御納得のことでしょう。私たち道の者は死んだら「キラ星となつて天上からご加勢する」と聞かされています。

奇しくも、死を前にしてお孫さんに語りかけた「おじいちゃんね、お星様になつて見守っているからね」は、まさにご自分が天上からのご加勢を誓われた、最高の贈り物であったと思います。

おやかたさまの世直り国替えのために、故人のみたまさんは、天上をあちこち駆け回り、お役を果たされていることだと思います。

寄稿

# 憂国の武士もののふ

## 国際政治学者

若泉わかいずみ 敬けい

—— 沖繩返還時、「核密約はあった」 ——

私は在学中、若泉氏が地元鯖江の人とは知らずに「国際経済学と世界の中の日本」を3回生の時に受講していた。

若泉 敬（昭和5年〜平成8年）は、元京都産業大学法学部教授で、沖繩返還交渉において、佐藤栄作の密使として重要な役割を果たした。1994年（平成6年）自著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』で沖繩返還に関する「核密約」が存在していたことを暴露した人物である。

彼がこのような功績を残し、苦悩の中に大

福井 濱田啓資ひろし



学の教鞭をとっていたことは知る由もない。細くすらすらとした容姿とは違い、大講堂での講義は決して大きい声ではなかったが、力強く切実で真剣なものだったと記憶している。私が大学を卒業して福井に帰ってから数年後、地元新聞に彼が自死したことが報じられ、そこで彼が同郷であることを知った。

先日、生誕の地である福井県越前市で越前市20周年記念講演が開かれ、愛弟子であった国家安全保障局初代局長の谷内正太郎氏の話を聞くことができた。若泉氏の質素で誠実で

国を思う、国を憂う情熱や行動は、まるで武士のようだったという。

戦時中に中学生だった若泉は、日本の敗戦に納得ができずに、日本必勝と教えていたすべての教員の家を訪問し、「なぜ勝つはずだった日本が負けたのか？」と聞き回ったために、教員からは避けられていたというエピソードを聞くことができた。

福井（越前）出身の橋本左内、松平春嶽から少年成年時代に強く影響を受けていたという。彼の地球規模の視野は地元福井を超え、世界の中の日本の立ち位置、日本のあるべき姿を探求していたのだろう。

沖縄県民に対する贖罪の形として、「他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス」という沖縄返還条件に関する国にとつては都合の悪い、いわゆる暴露本を出版した。しかし国もマスコミもそ

の真実に沈黙し続け彼を無視した。彼はこの本の英語版の出版契約締結後に青酸カリで自宅にて服毒自殺をするのである。

私は沖縄に行くことが度々あるが、米軍基地の現状や米軍人による沖縄県民に対する事件や事故を見聞きするたびに、米軍に対する怒りと同時に、若泉先生の無念の気持ちが湧いてくるのである。これは同郷の人だから、大で講義を受けたからだけではなく、独立国日本として、今の現状は果たしてこれで良いのだろうか、これから沖縄を含め日本はどうなっていくのだろうかという、一種の大和魂のような気持ちが湧いてくるのだ。

高市政権になり、中国は彼女の発言を都合の良いように解釈し、誤った情報を中国本国や諸国に流布している。敗戦状況でできた日本国憲法の根幹に係る重要な密約があり、本

人の意思に沿わない形で53年も続いているということを皆さんに知っていただければ幸いです。

私の母校である京都産業大学のホームページには以下のように掲載されている。

若泉敬（1930～1996）は、戦後27年間アメリカの統治下にあつた沖縄本土の返還に尽力した国際政治学者だ。福井県の越前市横住町に生まれた。1945年7月に、彼は米軍B29爆撃機による福井大空襲を体験し、戦争の悲惨さを知り、平和について考え続けた。その後、成長した若泉は「みんなが平和に暮らすために政治が必要」と考え、国際政治学者を目指す。1954年には東京大学法学部政治学科に入学し、卒業後は保安庁保安

研究所教官（助手）として勤務した。さらに、ロンドン大学大学院とジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究所へ留学する。留学をきっかけにアメリカなど諸外国に積極的に出向き、ホワイトハウスに近い人々とも親交を持った。

戦後アメリカの統治下にあつた沖縄本土の返還について、当時の佐藤首相は「外務省を通じた正式な外交ルートでは、返還が非常に困難」と考えていた。そこで、当時国内外で活躍していた国際政治学者の若泉に、ホワイトハウスの意向を聞くよう、密使としての交渉を依頼した。1967～1968年にかけて、若泉は何度かアメリカにわたり、1968年に、交友関係のあつたジョンソン大統領特別補佐官ロストウと面談し、佐藤首相の意向を伝え、直後の日米首脳会談で「両3年以内」

に返還交渉を始めることで合意。その後、ニクソン大統領特別補佐官キッシンジャーと何度も交渉を行い、1971年6月に沖縄返還協定が調印され、翌年5月に沖縄本土が復帰した。

その経緯の裏には秘密合意議事録が存在する。佐藤首相は「核抜き・本土並み」「非核三原則」を掲げ、沖縄からの核爆弾撤去を強く望んだが、アメリカは「核抜き」に難色を示した。当時の沖縄には核爆弾メースBが配備されており、アメリカ側のベトナム戦争進行における沖縄基地の重要性が高まっていたからである。畳みかけるように、キッシンジャーは沖縄からの核爆弾撤去に対し、ニクソン大統領が取り組んでいた繊維問題を取り上げた。最終的に、アメリカは①沖縄にある軍事基地の自由利用の保証、②繊維に関する対米輸

出自主規制、③緊急時の核兵器再持ち込み、これらを沖縄返還に応じる条件として日本に提示。1969年11月、佐藤首相とニクソン大統領は秘密合意議事録に署名し、同じ月に両首脳は「佐藤・ニクソン共同声明」を発表し、3年後の沖縄本土の返還が決定した。

沖縄返還後の1980年、若泉は福井県鯖江市に転居し、静かに隠棲する。鯖江の邸宅には若泉を慕う各国の大使が訪れた。彼は沖縄本土返還の秘密合意について、「他に策はなかった」と思いながらも、核の再持ち込み密約に関わったことで、沖縄県民に対し、申し訳ないという思いで自責の念に駆られる。さらに「施政権さえ還ってくれば、沖縄の米軍基地は減少し、沖縄の負担も軽減される」と若泉は考えていたが、返還後も負担が軽減されることはなかった。

若泉は晩年まで、家族や友人にも沖縄返還の詳細を知らせることはなかったが、自責の念が膨らみ、核再持ち込み密約など沖縄返還交渉の実態を明らかにした著書「他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス」(1994年5月15日文藝春秋より)を刊行。同時に、平和を享受する今の日本を「愚者の楽園」として警鐘を鳴らし、現在も基地問題が残る沖縄にとつて、「本当に返還は正しかったのか」死期を迎えるその時まで苦悩し続けた。1994年6月、彼は沖縄慰霊の日に、沖縄県民と大田沖縄県知事に宛てた嘆願状(遺書)をたずさえ、「結果責任をとつて自裁する覚悟」で国立沖縄戦没者墓苑を訪れる。墓苑の前に座し、長時間祈り続ける中で自裁を思いとどまった。

そして、当時ガンに蝕まれていた若泉は与えられた余命をいかに生きるべきかを考える。

亡くなるまでの数年間、彼は沖縄慰霊の旅を行う決意をした。その中で、彼は自ら壕に入り、遺骨の採集を行い、ようやく見つかった遺骨を手に涙を流しながら、沖縄戦で亡くなった方々を弔うべく供養した。1996年7月、自宅にて自ら生涯を閉じた。

ちなみに、彼は1964年に京都産業大学法学部の教授として招聘され、本学の世界問題研究所長も兼任していた。国際政治学者でありながら、同時に教授として教鞭を執り若者の教育にも熱心に取り組んだ。沖縄本土の返還から戻り、隠棲が終了した後も本学で講義を行い、学生たちと真剣に向き合う。1992年、彼は本学を退職した。

(以上 京都産業大学HPより)

# 三月下座奉仕を終えて

福島 高德文親



令和七年四月〜六月、三月下座奉仕をさせていただきました。下座奉仕は、久々で七年ぶりということをおうかがっておりましたし、周りの期待や「あいつらにできるのか?」という不安の声もあつたとも、聞いておりました。

事態が起き、その間に一日研修と三日研修を受けることができて、お繋がりをさせていだいた経緯がございました。今思い返してみると、「これこそ、〃かむはかり〃なんだ」と感じています。

振り返ってみますと、私が令和元年六月に再繋がりをさせていただいた時は、母の介護を始めて3年目でとても繋がれるような状況ではなかったのですが、たまたま母が骨折して入院したため三ヶ月間の入院治療を要する

令和元年から令和六年二月、母の死去までずっと介護と仕事の日々を過ごして参りましたが、仕事ができる日は月曜日と木曜日の週二日だけで、売上げも通常の五分の一まで減少しました。

そこへもつてきて週二日の練合、月一回の東京・東北の練合、月末は一泊二日の場への帰参があり、生活費を賄う事も大変な日々でした。今思うと良くやって来れたな、と感じています。

その後は、令和六年五月より六班の五日当番を、先輩道友からのお誘いで始めさせていただきました。今まで一泊二日でしたからとても長く感じたのですが、終わってみるとなると充実した六日間だったのだろう。天の場に置いていただくありがたさを体験させていただきました。

当番下がりの日は朝から雨が降っていたのですが、出発直前には急に天候が変わり、場を出るとまた雨が降っている事にびっくりしたのを今でも覚えています。あたらしい道の

「場」のところだけ光が注いでいる、ほんの一瞬间の出来事でしたがおやかたさまに見守られている、と感じました。

令和六年七月に、それまでに決まっていた仕事に着手しようとした矢先に、急なトラブルでその仕事がキャンセルになってしまい、とても大口の取引でしたからなんとかならないかと掛け合いましたが最終的には覆ることもなく、もう一件の仕事の方も何故か延期と散々な状況となり、挙句に何とか仕事を作ろうと様々な会社を訪問するのですが、どこも同様に首を縦に振ってくれませんでした。

八方ふさがりの状態で、八月からは場に戻れない状況が三ヶ月続きました。あの手この手と頭を使うのですが、それが間違っていました。一度もみたまさんに問うていない自分でした。その時の自分はおかげを求めている

のですから、天は回して下さるはずがありません。その時は「これでいいんだ」と思う事でじつとしていました。

不安とおかげを期待する毎日が続きましたが、その内、「自分事になっている人間には国替えなど任せるはずがない。全てお任せします！」と思いを替えた途端に、小さな仕事ですが、場に戻るだけのお金ができて、十一月から戻れるようになりました。

場に戻らせていただくと、東京のSさんから来年四月からの下座奉仕をしてみないかとお誘いがありました。大阪のSさんと東京のOさんが決まっているけどあと一人足りないのでは何とかやってみないかという事でしたが、丁重にお断りさせていただきました。まだ時間があるから考えてみてくれと言われるので

すが、今の自分の現状を考えるととてもできる状況ではありませんでした。

相変わらず大変厳しい状況でしたが、場に戻らせていただく路銀は回して下さいました。その頃、私はある方のお世話をするお役をいただいておりますので、場にいる間は四六時中その方と一緒に行動していました。

その方は身体がとてもきついのに、いつも私の事を気にかけて下さいました。ご垂示の受け取り方や、「これどう受け取る？」などいつも気に掛けてくれて、時間のある時はおやかた様をお世話されていた当時の事を詳しく話して下さいました。身体がきつくて歩ける状態ではないのに、杖をつきながら、「この状態を喜べるか？　このような状態でも喜んで通った人がいる。分かるか？」

と、一つ一つ教えていただきました。その方の姿を見させていただいて、自分は金が無いだけで丈夫じゃないか。三月下座を受ける事が今やるべき事だと思い、三月の下座奉仕をやらせて欲しい、と報告したのです。

下座奉仕の際もお金は全くなく五万円はできたのですが、あと5万円足りないが、六班の先輩道友の皆さんが餞別で五万円出し合つて下さり、何とか下座奉仕できる体制になりました。

下座奉仕初日から、知らない方とお会いする緊張感が、とんでもなくありました。皆さんとても恐い顔をしておられましたし、一言も口をきいて下さいませんでした。私は六班の人位しか知りませんでしたから、言われた事

だけしつかりやろうとだけ思つて行動をしていました。これがあと三ヶ月も続くのか、帰りたいなと一日目の日記に書いてありました。

朝四時五〇分起床。

朝のゴミ出し、施設外の清掃、国旗・苑旗の掲揚、朝食のお茶の用意、松の間・紫の間の清掃、朝礼、当番との打ち合わせ、苑内清掃、練合、昼食のお茶、風呂・みそぎ場の準備、苑内清掃、練合、松の間の準備、夕食のお茶、風呂、練合、松の間のお行、紫の間のお行、風呂場・みそぎ場の片づけ

松の間の片づけ、就寝、これが下座奉仕の一日です。

毎日が同じ行程で進むのですから、色々な余計な考えは浮かばなくなります。ただ黙々

とこなす事が習慣となってきました。

四月になって松の間のお行の際に、大阪のある方がお父さんについて発言された時、ふと自分の父の笑っている顔が浮かんできました。それが何となく嬉しい気持ちになり、その後紫の間で突然、父さんが話しかけてくるように感じました。

父の生い立ちや父の色々の悔しさ、また、前に俺と同じ道を歩ませたくないという親の思いなどがどんどん湧いてきました。その思いを聞いていると全く自分と同じだ。父さんが思っている悔しさと自分の思っている事が全く同じ事だ、と気付かされました。そのあと涙が止まりませんでした。

お行が終わって部屋に戻ると、二年間悩まされていた膝の痛みが全くないんです。東京のOさんから、「因縁を果たしたんだよ」と言

われて、経験が無い自分には、これが果たすという事なのかと分からされたのが、一番の思い出です。

その日から天の場に置いていただけるのは本当に有り難い事だと感じ、いつの間にか、今日は下座奉仕から何日目だ、と思うようになりました。一班から五班の方々ともお話する事ができ、有難いことに四月よりも五月、五月よりも六月と、段々その機会も増えてきて、教えていただく色々な事も今までとは違った感覚で頂くことができ、本当に有り難いと思える毎日でした。

私は、偉がる、逃げる、余分が多い、好かれようとして何も言わない良い人など、建て替えなければいけない思い方を浮き彫りにさ

れました。その中で「人の話を聞かない」が、全く分らないでおりました。これも偉がる、自分が正しいという思いを知らず知らずにとんどん増長させていったんだと思います。

天の場での九十一日間、自分が建て替えなければいけない思い方、つまり心のしにくさを一つ一つ見せて下さった事が収穫でした。

下座奉仕が終わり福島に戻っても、相変わらず仕事はない状況は一緒です。いや、更にきつくなりました。七月から十月まで帰参できず、十一月からやつと帰参できるようにになりました。

下座奉仕したから楽になるのではなく、更にきつくなる。

これも、下座奉仕したから耐える事ができると感じます。

今思う事は、一回目の場に戻れなかった思  
い方とは違います。

この道は苦を通る事を喜べるかを天上は見  
て下さっているんだと思います。この苦もお  
行と思えばありがたいと感じます。ちゃんと  
お行するように天上は回して下さっている  
のだから、喜んで通らせていただきます。本  
当はきついですが、喜べる自分になりますよ  
う日々精進させていただきます。

今回下座奉仕に当たり、様々な助言やサ  
ポートをしてくださった本部の皆様・職員の  
皆様・各当番の皆様にご改めて御礼申し上げま  
す。本当に有難うございました

# お米の理

東京 山口二雄



## 理の根元

米は八十八 これが米の分である

道の教えは 米から知らされたものである

米は種もみを身そぎして 田に植えられ

根を張り 芽を出し 茎が伸び

花が咲いて 穂が出て 実って 頭を下げて

通り 刈り取られて 精米され 糖と別れて

水につかって もまれた上に 火にかけられ

飯となり 人に栄養をあたえ 人を肥えさせ

て 糞となり そのうえ 植物の肥となって

一生を人のために 苦勞する

これ理の根元である

(神光社刊「米の理」より)

山口二雄つぎおさんから、「自宅で小さな水田づくり」を行いました、とのご報告を戴きました。写真と絵と昨年のモミの実物を一緒に送って下さいました。

山口さんは、水稻を身近に育ててお米の成長の様子を体験してもらえよう、これまから縁ある方に左の説明文と絵でお米作りの方法をお伝えし、体験していただくよう勧めておられます。





約6ヶ月後



実物のモミ



油絵 富士山と田園風景 東京 山口二雄さん作

訪問記

# 伊藤誠治さんを訪ねて

東京 佐瀬康志



令和七年十二月十六日、東京の伊藤さんのお宅に、道友三人で伺いました。東京の小泉弘久さん、兵庫の小池俊行さん、それに私です。以前、伊藤さんがやっておられた場の当番の一班の元メンバーです。

伊藤さんは非常にお元気で、私が三年前の十二月に訪問した時は、手術しても後二年と言われたそうです。それが丸三年経っても伊藤さんはこの様に元気で肌の色も良かったです。

本人は話が出来ないので何となくうなずい

たり、簡単な言葉を言ったりしてまとまった話は無かったのですが、貴重な二時間でした。午後四時頃迄の二時間でしたが、楽しくてあつという間に時間が経ってしまいました。また来て欲しいと話がありました。

小池さんは兵庫からやって来たので、靖国神社や明治神宮に寄って帰るということです。厚味さんが息子さんに連絡とってもらえるので、今回も厚味さんに連絡して戴きました。伊藤さんは、小学校一年のお孫さんが時々来てくれると喜んでいました。写真は訪問介

護士の方に撮って貰いました。

私は前回、伊藤さんが元気で話が出来た、手術の前の日にこちらにお邪魔したわけですが、その後、私の方が、前立腺がんになり、私も摘出手術をしました。誰にも話せなかつたのですが、その時の大きな力となり、それも含めて私が思わされたことは、やはり、

「気がその人を生かすんだ。今後も負けない様にしっかりと気を持たないといけない」

ということでした。改めて「気」のことが感じられた今回の訪問でした。





犀川に架かる日名橋と菜の花（愛知県）

## 編集後記

「義の国への道

〈日本人本来の姿を取り戻す〉

——産経新聞オピニオン

『正論』より——

令和は第二の明治に

◇令和八年の新年を迎えて、い

ま世の中は大きく転換しよう

としている。

◇令和を、義の精神を持つ第二

の明治にせよ、と主張する学

者が現れたのだ。

◇元都留文科大副学長で文芸批

評家の新保裕司氏は、平成改

元だった七年前、正論欄で既

に、戦後の日本に「義」が足

りないと看破されている。

◇さらに、今年の正論欄では、令

和は「第二の明治」にならな

ければならない。明治の精神

とは一言で言つて「義」に他

ならないからだ、といわれる。

◇神奈川支部の浜口正行さんが、

元旦付けの産経新聞を持つて

きて下さった。新保氏の正論

欄『義が時代思潮の基調であ

る国へ』がそこには載つてい

た。

◇新保氏はなぜ、そう言われる

のか。

◇いまの「日本の危機は、精神

のあり方に根源的な問題」が

あり、「対症療法的な対策」で

はとても克服できるようなも

のではない、からだ。

◇だから、「日本が抱える内憂外

患の危機の深刻化」に対処す

るには、明治の「義」の精神

が必要だ、と主張される。

◇昨年あたりから、「ようやく義

を重んじる気風」が「時代思

潮の表」に現れてきたが、

◇さらに、「義の国への歩みを力

強く深いもの」にするため

は、「明治の精神」を踏まえる

ことが必要だ、とされている。

◇「少年よ、大志を抱け！」で有

名な、明治の精神を象徴する

クラーク博士の札幌農学校は、

今年が開校一五〇周年。

◇二期生として内村鑑三と

新渡戸稲造がいた。内村は『後

世への最大遺物』を、新渡戸は『武士道』を著した。ともに、明治期の日本を世界に紹介し、海外で今だにベストセラーだ。

◇『後世への最大遺物』とは「勇ましい高尚な生涯である」というが、勇ましい高尚なる生涯とは、「義が発現する生涯」とも言い換えられる。これに拍手を送るのが「当時の明治の精神」だったのだ。

◇『武士道』での徳目は、最初がやはり「義」である。あとに、「勇」「仁」「礼」「誠」などが追随する。

◇最後の章「武士道の将来」では、「最も進んだ思想の日本人

にてもその皮に搔痕そうこんを付けて見れば、一人の武士が下から現れる」という。

◇一世紀以上のちの今日の日本人も、例えばグローバリズムのただ中に浸っているとしても、「その皮に搔痕を付けて見れば、一人の武士が下から現れる」はずだという。

◇我に返ってみれば、この世の中に起きることは「すべて『場』で起きたことが反映されて起きている」といわれる。

◇様々な問題が起きる「場」でも、とうとう、人間の本来性が勃発し、一度「明治の頃に還る」のではないだろうか。

◇「山が動いた」

そういうことが起きても不思議はない新年である。天意を聴きながら、場を見守りたい。あとは祈るのみ。

◇関連して、平川祐弘ひらかわすけひろ東大名誉教授は、この新保氏の著書を高く評価している。

「わが国の歴史評論で快著が出た。『美か義か』(藤原書店)は文芸評論家新保祐司氏の本思想史の見取り図で、わが国は「美の国」と「義の国」が交互に続くという大きな分け方を提示した」

◇この著書こそ、慧眼。日本には珍しい、歴史哲学の分野を開くものである。

季刊誌「あたらしい道」のご購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

(年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。各発行月の前月15日までにお問い合わせ致します)

申込先

あたらしい道本部

電話番号 0729 (56) 7971

FAX 0729 (57) 5100

季刊誌「あたらしい道」 令和8年春号

令和8年3月8日発行 (第546号)

発行責任者 中井 健

編集責任者 柳田 泰

発行所 一般財団法人 あたらしい道  
大阪府羽曳野市はびきの3-3-18  
〒583-0872 TEL: 0729 (56) 7971

印刷所 キクイ印刷工芸社  
大阪府羽曳野市古市6-12-9  
〒583-0852 TEL: 0729 (56) 6881



季刊誌「あたらしい道」

---

令和八年春号

第546号

(2026年)

---

発行／一般財団法人 あたらしい道